日本農業新聞 令和８年11月10日掲載

農業技術プリズム

大麦「はるか二条」カモ食害
剪葉時期と生育・収量の関係

分げつ期までの対策を

長崎県内の麦産地では、マガモやヒドリガモなどのカモ類による食害が見られる中、カモ対策を効率的に行うためには、どの生育ステージで受けた食害が生育や収量に大きな影響を与えるのかを明らかにする必要があります。

そこで、11月中旬に播種（はしゅ）した二条大麦「はるか二条」を対象とし、ヘッジトリマーを使って地際から剪葉することによりカモの食害を再現し、食害時期が生育や収量に及ぼす影響について検討しました。

その結果、分げつ期までの剪葉は、その後の生育や収量には影響しませんでしたが、最高分げつ期以降に剪葉をすると出穂期・成熟期が遅れ、穂数の減少やむず麦の増加により減収することが分かりました。

このことから、分げつ期までは、食害を受けてもその後回復すると考えられますが、最高分げつ期以降の食害は減収につながるため、この時期の対策が特に重要です。

また、生育が進み、草丈が高くなり、葉が堅くなると食害を受ける頻度は減ることから、分げつ期の後半から茎立期ごろまでの期間に重点的に対策を行うことで、より効率的に被害を防ぐことができると考えられます。

（長崎県農林技術開発センター農産園芸研究部門作物研究室主任研究員　林万智子）

剪葉の時期がその後の生育と収量に及ぼす影響

剪葉日（月/日）	剪葉時の生育ステージ	出穂期（月/日）	成熟期（月/日）	子実重（kg/a）
12/20	分げつ期	3/17	5/9	75.8
1/14	分げつ期	3/16	5/9	62.7
2/3	最高分げつ期	4/2	5/14	43.8
2/26	茎立期	4/2	5/18	21.6
3/10	穂孕期	4/13	5/22	8.9
無処理		3/15	5/9	73.7

最高分げつ期以降の剪葉は無処理と比べ、生育を遅らせ、収量が低下する